

## 講演

## 自由診療への道

富永 正志

## ●抄 録●

1979年千葉県松戸市で開業し、1992年東京都港区麻布十番へ移転開業しました。松戸時代は保険診療で、麻布十番へ移ってからは自由診療で始めました。保険診療で14年、自由診療を始めてからは現在まで17年経ちます。

自由診療とは、治療を行うにあたり何事にも制限されずに自分の能力に応じて治療方法を自由に選択できる。もちろん患者の同意は必要です。言いかえると治療は保険に合わせて行うのではなく、病気に合わせて行う。治療方法は自分の能力に制限されるので能力を高めるために勉強をするということです。保険の枠組みにとらわれないので最初から自費診療となります。保険診療を行ない途中から自費に切りかわるのは利益が上がりますが、最初から自費だと大変です。ではなぜ自由診療を行うのか。テレビの父と言われる高柳健次郎の言葉を送ります。“恒に夢を持つこと、志をすてず、難きにつく”

キーワード：保険診療、自費診療、自由診療、歯科の三大治療、全身咬合治療

## I. はじめに

1974年（昭和49）大学を卒業し、5年間の勤務医の後、1979年（昭和54）千葉県松戸市で開業し、そして1992年（平成4）東京都港区麻布十番で移転開業しました。松戸時代は保険診療で、麻布十番へ移ってからは自由診療で始めました。保険診療で14年、自由診療を始めてから現在まで17年経ちます。

学生時代は学生運動の盛んな時で、実習以外は出席もあまりとらず、授業には真面目に出席しませんでした。そのせいか、学校を出てから勉強が始まりました。

昭和50年、60年代の著名な先生方の講演、講義、実習にはほとんど参加したと思います。（図1）

若林勝夫先生、有賀重則先生、奥川幸二先生、片山恒夫先生、大津晴弘先生、森克栄先生、尾沢文貞先生など、教わった多くの先生方は自由診療を行なっていたので、自分もこのまま勉強していけば自由診療を始められると、漠然と思っていました。



※冬期学会講師

（とみなが・まさし）  
 歯科医師  
 ICDフェロー  
 東京都開業

昭和50年、60年代（1975-1989年） 自由診療			
若林 勝夫		尾沢 文貞	
有賀 重則		頼 弘	
奥川 幸二		大谷 満	
片山 恒夫		松平 邦夫	
大津 晴弘		加藤 元彦	
森 克栄		織家 勝	
（敬称略）			

図1 昭和50年、60年代の自由診療医

Fig.1 Dentists dealing with self-pay treatment during 1975-1989

## Ⅱ. 自由診療とは

現在では自由診療＝自費診療と、とらえがちですが昭和50年代当時の自由診療の意味合いは少し違います。自由診療とは治療を行うにあたり何事にも制限されずに、自分の能力に応じて治療方法を自由に選択できる。もちろん患者の同意は必要です。言いかえると治療は保険に合わせて行うのではなく、病気に合わせて行う。治療方法は自分の能力に制限されるので能力を高めるために勉強をするということです。

歯内、歯周、補綴治療は歯科の三大治療といわれます。これらを勉強していくと細分化されミクロ的になっていきます。いつしか人間全体をみなくなり、疾病のみを追いかけるようになります。保険の仕組みもそうになっています。自分にとって幸いな事に、石川達也先生、尾沢文貞先生が行っていた全身咬合治療と出会います。咬合の状態が全身の健康に影響すると、全身をみる治療を取り入れるようになり、東洋医学<sup>1)</sup>、整体法、カイロプラクティック、頸椎分析<sup>2)</sup>など保険の枠組みからはずれた治療も多くなりました。

## Ⅲ. 自由診療を目指して

将来、自由診療をしようと決心したのは開業してから7年目の昭和61年です。いざ自由診療を始めるとなると、保険をやめて診療所の経営が成り立つのか、自分達の生活はどうなるのかいろいろ不安がありました。が、次の三項目を決めました。

1. 予約時間を守る
2. 最終アポイントを午後5時にして6時までには終わる。

## 3. 保険点数5万点を切ること

- (1) 補綴は自費へ
- (2) 歯周病の手術は自費へ

予約時間はあって無きか如し診療所が多いと思います。この一点を守り通すだけでも自由診療へと近づきます。時間に遅れてきた患者さんは時間を取り直してもらう。急患はみている時間がないので予約をしてもらう。多くの急患は別の医院へ行ってしまいます。その時大事なのは、今治療している患者さんに急患がきたけれどあなたの治療をしているのでことわりましたと告げる事です。一人の患者さんを失ったのではなく、一人の患者さんを確保したのです。

## Ⅳ. おわりに

誌面の都合上多く話せませんでした。自由診療は儲ると思っている人は自由診療はできません。保険診療を行ない途中から自費に切りかわるから利益があがるのであって、最初から自費だと大変です。

自由診療を行うにあたり一番難かしいのは、レセプトの誘惑からいかに逃れるかです。誤解を恐れずにいうと、レセプトは金のなる木です。麻布十番で自由診療を始めた平成5年のカレンダーに記入してあった言葉を最後に送ります。テレビの父といわれる高柳健次郎の言葉です。

“恒に夢を持つこと、志をすてず、難きにつく”

## 参考文献

- 1) 富永正志：東洋医学からみたインプラントの活用、国際歯科学士会日本部会雑誌、34(1)：57-61、2003.
- 2) 富永正志：咬合と全身とのかけ橋“頸椎”―頸椎X線分析法―、国際歯科学士会日本部会雑誌、33(1)：167-172、2002.

## Path to Self-pay Treatment

Masashi TOMINAGA, *D.D.S., F.I.C.D.*

I started practice in Matsudo-shi, Chiba, in 1979, transferring later to practice in Azabujuban, Minato-ku, Tokyo, in 1992. In Matsudo I incepted health insurance treatment, then shifting to self-pay treatment in Azabujuban, which means I have practice records of 14 years with health insurance treatment and of 17 years to date with self-pay treatment.

By self-pay treatment we can freely choose, when providing medical treatment, treatment measure depending on our medical skills without any restraint. Of course we need the patient's consent. In other words, we provide treatment not in accordance with health insurance but with illness. As treatment measure could be limited to our own ability, we have to train and study to enhance our capability. In this system we provide treatment with private expenses since it is free from the framework of insurance. While the changeover in mid-course to treatment with private expenses from health insurance treatment yields a profit, it is hard-pressed to provide treatment with private expenses from the beginning. Then, why self-pay treatment? In answer to it, a saying of Kenjiro Takayanagi, called the father of television in Japan, goes: "Keep holding a dream, never lose expectations, and face difficulties."

**Key words :** Health Insurance Treatment, Treatment with Private Expenses, Self-pay Treatment, Three Major Treatments of Dentistry, Whole Body Occlusal Treatment